

す く う ・ く む

小 林 和

1. はじめに

(1) 三人は汗をふいてしやがんで、まつ白な岩からごぼごぼ噴きだす冷たい水を
何べんも掬つてのみました。 (宮沢賢治『風の又三郎』)

(2) 床几の前には冷たそうな小流があったから手桶の水を汲もうとして一寸気が
ついた。 (泉鏡花『高野聖』)

「すくう(掬)」と「くむ(汲)」は、共に液体を取り上げる動作を表す動詞であり、
これらの文ではそれぞれ言い換えが可能である。しかし、

(3) Blue ため息が こぼれて咲いた花
すくえば指をくぐる 水に落ちたヴァイオレット
(吉元由美『水に落ちたヴァイオレット』)

この詩では、「すくう」を「くむ」と置き換えることはできない。

本稿では、「すくう」「くむ」両動詞の比較により、その意味特徴を考察したい。

2. 考 察

前掲の例文(1)～(3)から、「すくう」は液体と固体の両方を対象とすることがわかる。
一方、「くむ」の対象となるのは液体、それも「水」に限られる。「水」以外では、「酒」
「お茶」などにごく慣用的に用いられるのみで、同じ「飲み物」でも「コーヒー」「紅
茶」などでは普通用いられず、また、対象が「水」である場合とは意味を異にする。
ここでは、「水」を対象とする場合を中心に考察する。

2.1. 名詞句の共起制限

「すくう」「くむ」は、普通次のような格をとる。

(4) 〔主体〕ガ 〔対象〕ヲ 〔道具〕デ 〔場所・物1〕カラ
〔場所・物2〕ニ すくう。／くむ。

以下、それぞれの格に立つ名詞句に対する共起制限について考察を進める。

2.1.1. ガ格 主体

(5) 私が 水を すくう。

- (6) 私が 水を くむ。
- (7)× ポンプが 水を すくう。
- (8) ポンプが 水を くむ。

「すくう」に共起するのは道具を扱うことができる「手」を持つ生物となるが、「くむ」ではさらに「ポンプ」等の機械でもよい。これは、「すくう」という行為が基本的に人間の手の動作であることを示している。

2.1.2. ヲ格 対象

「すくう」「くむ」の対象については、次のような制約がある。

- (9) 海面の海水を すくう。
- (10) 海面の海水を くむ。
- (11)× 海底の海水を すくう。
- (12) 海底の海水を くむ。

まず、「すくう」は液体（固体）の表面部分のみがその対象となるが、「くむ」にはそのような制限はない。

- (13) スプーンで 水を すくう。
- (14)× スプーンで 水を くむ。
- (15)× バケツいっぱい に 水を すくう。
- (16) バケツいっぱい に 水を くむ。

次に「すくう」は、対象の量に、人間があまり力を入れずに、無理なくとりあげられる程度の上限を生ずる。他方、「くむ」を用いると、「すくう」を用いた場合に比べて、対象の量が多いように想定される。

- (17) 走って行ってバケツに水をくんで大あわてで駆け戻ってくるのがやっとなる。
(筒井康隆『カンチョレ族の繁栄』)

上の例では、「くむ」を用いただけで、水がある程度の量を持っていることを読み取ることができる。

2.1.3. デ格 道具

- (18) 手で水を すくう。
- (19) 手で 水を くむ。
- (20)× ガラスビンで 水を すくう。
- (21) ガラスビンで 水を くむ。

(22)[×] ポンプで 水を すくう。

(23) ポンプで 水を くむ。

「すくう」で用いられる道具は器状のものに限られ、また人力を要するものであることがわかる。「くむ」には、この制限はない。

2.1.4. カラ格 場所・物 1

(24) 桶から 水を すくう。

(25) 桶から 水を くむ。

(26)[×] 地下から 水を すくう。

(27) 地下から 水を くむ。

(28)[×] 水道から 水を すくう。

(29) 水道から 水を くむ。

「くむ」は、この場所・物の形態に制限はないが、「すくう」では対象となる液体・固体の表面が想定されうるようなものでなければならない。

2.1.5. 二格 場所・物 2

(30) 桶に お湯を すくう。

(31) 桶に お湯を くむ。

(32)[×] 風呂に 水を すくう。

(33) 風呂に 水を くむ。

(34)[×] 庭の池に 水を すくう。

(35) 庭の池に 水を くむ。

「すくう」では、対象の量の制限と同様に、あまり容積の大きいものとは共起しない。

2.2. 「すくう」の表す動作の様態

(36)[×] 海底の海水を すくう。(=11)

(37)[×] 地下から 水を すくう。(=26)

(38)[×] スポイトで 水を すくう。

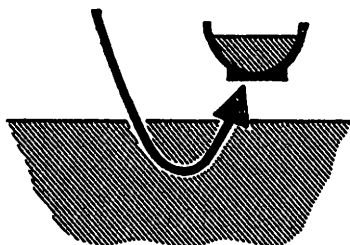
「すくう」には、対象の様態〔36(37)〕・道具の形態〔38〕などに制限がある。これは、その動作の様態から生じるものである。液体などを「すくう」には、用いる道具を上向きにして、持ち上げるように取り出さねばならない〔図参照〕。このとき、道

具を水平に動かしながら「すくう」場合が多いが、垂直に上げ下げしても「すくう」ことができる。

さらに、人力で「すくう」ことができる量には自ずと限界があり、対象の量の制限を生じる。

(39)[×] バケツいっぱい 水を すくう。(=15)

(40)[×] 風呂に 水を すくう。(=32)



2.3. 「くむ」における目的意識

(41)[×] スプーンで 水を くむ。(=14)

(42)[×] スポイトで 水を くむ。

「くむ」は、対象物を利用しようという目的の下での行為である。液体を利用してある目的を達成しようとする場合には、一般に、ある程度の量の液体が必要となり、ゆえに、対象の量に対する制限を生ずる。

他方、「すくう」は、

(43) コットンのシャツをすこしまくって 海の雫をそっとすくえば

まだ冷たいねと肩をすぼめた あなたはまるで年下のような

(秋元康『恋のロープをほどかないで』)

のように、特に対象の利用を目的としないと思われる。

2.4. 重点のある段階

国立国語研究所1972『動詞の意味・用法の記述的研究』では、「液体のある場所から他の場所へうつしいれる」動作に、「まずある場所から水などを取り出し、これははこび、そして別のうつわなどに入れる」という3つの段階を設定し、「くむ」は、

それらの「どの段階に重点があるともいえない場合が多い」としている（p.211～2）。

(44) 手桶から柄杓で水を汲んでは植木に水をくれているのは、

（徳田秋声『あらくれ』国研 p.212）

(45) みそ萩の側には茶碗へ一杯に水が汲まれた。（長塚節『土』国研 p.211）

(46) 風呂に水をくむよう言われて、井戸からくんだ。

「くむ」は、そのそれぞれの段階をあらわすのに加え、それら全体をもあらわし得る。

一方「すくう」は、このうち第1の段階にその重点があるといえる。

(47) 桶に お湯を すくう。（＝30）

(48) ひしゃくで 桶に 水を すくう。

のように、二格をとると何となく座りが悪く感じられるのはこのためだと思われる。

ちなみに、「すくう」と同語源語である（森田1980）「すくう（救）」は、カラ格をとるが、二格をとらない。

2.5. 派生用法

2.5.1. 固体を対象とする「すくう」

「すくう」は、液体だけでなく固体をもその対象とする。

(49) バターを ナイフで すくう。

(50) 金魚を 網で すくう。

対象が固体であっても「すくう」が用いられるのは、動作様態が同じだからである。

(51) ヘラサギが くちばしで ドジョウを すくって 食べる。

(52) ショベルカーで 海底の泥を すくう。

動作様態が同じならば、共起制限はかなり拡大されるが、対象が表面付近のものであることは変わらない。「海底の泥」は、「海底の海水」(11)よりも深いところにあるものではあるが、「海底」という面の表面部分のものである。

(53) 足を すくう。

などの用法も、この動作様態の類似性から派生している。

2.5.2. 「水」以外を対象とする「くむ」

「くむ」は、「水」以外の液体も対象とする。

(54) 酒を くむ。

(55) 私は黙ってお茶を吸んでいるわね。（岸田国士『くれなゐ』国研 p.87）

これらの場合の「くむ」は、「飲む」「入れる」といった意味となり、2.5.の3つの段階のうち、第3の段階をあらわすことになる。

(56) 事情を くむ。

(57) 相手の意を くむ。

という用法も、「考慮に入れる」という意味で、やはり第3の段階に関連している。

3. まとめ

以上の考察から、「すくう」「くむ」の意味特徴を記す。

「すくう」 人間があまり力を入れずに、表面付近にある液体（固体）を、器状の道具を上向きにして、持ち上げるように取り出す行為。

「くむ」 ある目的のもと、ある程度の量を持つ液体（主に水）を、もとの場所・物から、別の場所・物に移し入れる一連の行為。

／参考文献／

国立国語研究所1972『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

森田良行1980『基礎日本語2』角川書店

言語経歴	1966年生～11歳	東京都新宿区
	11～13歳	東京都港区
	13～20歳	東京都新宿区
	20～	東京都小金井市

（こばやし かず・東京都立大学学生）